

令和6（2024）年度

雄 飛



令和6年度 栃木県青年農業者海外短期派遣研修報告

公益財団法人 栃木県農業振興公社

地域のリーダーとしての飛躍に期待して



公益財団法人 栃木県農業振興公社
理事長 青柳 俊明

当公社主催の「令和6年度栃木県青年農業者海外短期派遣研修」が無事に終了しましたことに対し、関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

我が国の農業を取り巻く状況は、大きく変化してきております。生産力の向上はもとより、温暖化への対応、環境への配慮、さらには、近年の国際情勢や円安による資材の高騰等を踏まえ、今後の農業経営の発展に向けては、栽培技術力や経営力の向上に加えて、国際情勢等を視野に入れ、農業のグローバル化にも適切に対応していくことが求められています。

そのため、県内の意欲ある若手の農業者を対象として、国際感覚を習得し、自らの経営はもとより、地域の発展に向けても活躍できる人材の育成を図るため、昭和62年から派遣事業を行って参りました。

今年度は、10月10日～10月17日の8日間、11名の青年農業者がEU加盟国で農産物の輸出額が世界第2位であるオランダ、古くから農業環境政策を展開しているドイツを訪問してきました。

今回、主役である青年農業者が主体的に取り組めるよう研修生の中からリーダー等を選出するとともに、現地ドイツの青年農業者と農業政策や経営の意見交換などの交流を新たに盛り込みました。異なる国の青年農業者の考え方を理解するとともに異なる文化や価値観に触れることで柔軟な思考や創造力が養われ、新たな視点を得ることができたと感じております。

加えて、ドイツでは大規模有機農場、オランダでは大規模土地利用型農家や大規模球根農家を視察し、規模の違いを肌で感じるとともに経営手法を学び、意識高揚につながったものと確信しております。

帰国後、福田知事に研修結果を報告した際に、「海外で学んだことを栃木の農業の未来のために、仲間とともに生かしてほしい」との激励を受け、自らの経営や地域の発展に向けて研修生一同決意を新たにしていました。

本研修の実施に当たり、ドイツ・オランダにおいて視察並びに意見交換を受け入れていただいた生産農家の皆様、ご尽力いただいた関係機関・団体の皆様に心からお礼申し上げますとともに、研修生には、本研修を通して生まれた強い絆を大切に、互いに協力し合いながら、本県農業の未来を切り開き、力強く牽引して行く地域のリーダーとなることを大いに期待しまして結びの言葉とします。

令和6(2024)年度 栃木県青年農業者海外短期派遣研修 研修チーム及び事務局名簿

第1班

係名	氏名	市町	栽培作物
リーダー 兼班長	てつか だいすけ 手塚 大介	宇都宮市	水稲、いちご、マンゴー
副班長	いしつか たいへい 石塚 泰平	大田原市	実家は非農家 雇用就農希望
記録	いけだ あゆむ 池田 歩夢	真岡市	水稲、麦(予定)
記録	おおつき りょうま 大槻 遼真	小山市	トマト、そば、大豆、小麦、ビール麦、水稲(予定)
写真	こまげ じゅん 駒場 潤	鹿沼市	農業法人勤務
写真	やまもと つよし 山本 毅	芳賀町	水稲、麦、大豆、じゃがいも、にんじん他

第2班

係名	氏名	市町	栽培作物
サブリーダー 兼班長	あおやぎ たつや 青柳 達也	下野市	麦、水稲、ごぼう、レタス、かんぴょう(予定)
副班長	もりおか ともたか 森岡 興隆	真岡市	いちご(予定)
記録	ゆざわ りゅういち 湯沢 隆一	日光市	玉ねぎ、じゃがいも、さつまいも、にんじん他
記録	みずぬま きら 水沼 輝星	真岡市	水稲、いちご(予定)
写真	こばやし ちほ 小林 千歩	那珂川町	いちご、レモン

事務局

役職	氏名	所属
マネージャー	きくち かつとし 菊池 克利	公益財団法人 栃木県農業振興公社 農政推進部 次長兼食と農推進担当GL
サブマネージャー	さくらい ひろや 櫻井 裕也	公益財団法人 栃木県農業振興公社 農政推進部 就農育成担当 主査

令和6年度栃木県青年農業者海外短期派遣研修生成果報告

氏名	市町	主な経営内容	備考
てつか だいすけ 手塚 大介	宇都宮市	水稲 いちご マンゴー	リーダー
	今回の研修に参加して海外における先進技術や農業経営、農家としての信念など様々なことを学ぶことができました。この経験を活かして栃木県を代表する農家を目指し、栃木県の農業を盛り上げていけるように尽力していきたいです。		
あおやぎ たつや 青柳 達也	下野市	麦 水稲 ごぼう レタス かんぴょう(予定)	サブリーダー
	先進的な農業技術と効率的な流通システムに感銘を受けました。特に現地の若手農家との交流や温室栽培と自動化技術の見学を通して、日本の農業にも応用できる素晴らしい技術を学ぶことができ、大変有意義な研修になりました。		
こばやし ちほ 小林 千歩	那珂川町	いちご レモン	
	研修に参加させていただき、海外の文化や慣習に触れ、生きること、育てることをまた深く考えることができ、これからの大きな活力となりました。私のような農家の女性が研修に行けるような環境が当たり前になればと思いました。		
もりおか ともたか 森岡 興隆	真岡市	いちご(予定)	
	同じ志を持つ青年農業者と出会い、仲間づくりができたことは今後の財産になりました。来年から真岡市でいちごの新規就農者になる予定ですので、この研修で学んだことを生かして将来は県を引っ張っていく農業者になることが目標です。		
やまもと つよし 山本 毅	芳賀町	水稲 麦 大豆 じゃがいも にんじん他	
	農業先進国の現場を実際に見学し現地の農家との交流や意見交換を行ったことで、日本との違いはもちろん、農業政策や工夫点を学ぶことができました。また、食文化にもたくさん触れることができ、貴重な経験になりました。		
こまば じゅん 駒場 潤	鹿沼市	農業法人勤務(水稲、麦ほか)	
	訪問国では日本との文化や考え方の違いが農業の生産現場にまで出ていました。日本でもできること、日本だからできることを考え今後の経営、農業の発展に活かしていきたいです。貴重な経験をすることができました。		
おおつき りょうま 大槻 遼真	小山市	トマト、そば、ビール麦、水稲(予定)	
	この研修で日本ではあまり見ない大規模な農業や高性能機械を見たり、農家さんの前向きな話を聞いて、大きな刺激をもらいました。この刺激を糧に、これからも多くの知識や技術を学んでいきたいです。		
ゆざわ りゅういち 湯沢 隆一	日光市	玉ねぎ、じゃがいも、さつまいも、にんじん他	
	ドイツ、オランダの農業は情熱があり、見聞したことは自分の農業にプラスになりました。現在は兼業なので、農業だけで生活していくことが夢です。今後は人に求められ、必要とされる農家になれるように元気に農業に取り組んでいきたいです。		
いけだ あゆむ 池田 歩夢	真岡市	水稲 麦(予定)	
	海外では作業の効率化を意識して、自立を考える農家が多いことが分かりました。今回の研修で得られた貴重な経験を活かして、日本にはない技術を取り入れて自分の農業を確立していきたいと強く感じました。		
みずぬま きら 水沼 輝星	真岡市	水稲 いちご(予定)	
	訪問国で農業や文化に触れ、日本との違いを知ることができました。私は将来、スマート農業を積極的に取り入れ、省力的かつ安全な農業にしていきたいです。そして、自分で市場開拓をして消費者の農業の価値観を少しずつ変えていきたいです。		
いしづか たいへい 石塚 泰平	那須塩原市	酪農(雇用就農希望)	
	ドイツ、オランダ研修でたくさんのことを学ぶことができました。なかでも畜産農家の研修で鶏の放し飼いや搾乳ロボットなど日本とは全く違った方法に驚きました。今回学んだことをこれから活かせるようにがんばりたいです。		

令和6年度 栃木県青年農業者海外短期派遣研修 行程表

	月日	曜日	都市	内容
1日目	10/10	木	宇都宮発 羽田空港 ドイツ ミュンヘン	とちぎアグリプラザ集合後、貸切バスにて羽田空港へ 航空機にて北極経由ミュンヘンへ(約14時間) 日本との時差－7時間
2日目	10/11	金	ミュンヘン	・バイエルン若手農家協会 ・ヘルマンズドルファー
3日目	10/12	土	ミュンヘン	・ビール工場見学 ・ファーマーズマーケット
4日目	10/13	日	オランダ アムステルダム	(フランクフルト→アムステルダム 航空機1.5時間) ・アムステルダム市内見学
5日目	10/14	月	アムステルダム	・アールスメール花市場 ・デイビット牧場(酪農家) ・マリアンヌ農場(大規模土地利用型農家)
6日目	10/15	火	アムステルダム	・WAMペニングス(球根農家) ・ウエストラントアールスベイ(いちご農家)
7日目	10/16	水	アムステルダム フランクフルト	航空機にてフランクフルト経由、羽田空港へ (約14時間)
8日目	10/17	木	羽田空港 宇都宮着	羽田空港到着後、貸切バスにてとちぎアグリプラザへ とちぎアグリプラザ到着後、解散

＜事前研修会＞



第1回事前研修会

団員の自己紹介や研修テーマの設定を行いました。



第2回事前研修会

国際農業者交流協会や農業振興公社金原部長から講話を聞き、派遣国の現状や栃木県の政策を学びました。

＜結団式・知事表敬＞



結成式

各団員が抱負を述べ、研修に向けて気持ちを新たにしました。



出発式

出発にあたり、研修の意気込みを表明しました。



帰還式

研修チーム全員が無事に帰還した旨を報告しました。



知事表敬

海外短期派遣研修チームとして知事を表敬し、研修の成果を報告しました。

＜研修先での様子＞



バイエルン若手農家協会（ドイツ）

バイエルン若手農家協会の青年農家と意見交換及び交流を実施



ヘルマンズドルファー（ドイツ）

農畜産物の生産・加工・販売まで一貫して行う大規模有機農園



アールスメール花市場（オランダ）

世界最大規模の花き卸売市場。80%が隣接の空港からヨーロッパ各国などへ輸出



デイビット牧場（オランダ）

乳牛 120 頭、鶏 3 万羽を飼養する大規模畜産農家。搾乳ロボットなどスマート農業を実践



マリアンヌ農場（オランダ）

経営面積 100ha の大規模土地利用型農家。ジャガイモ、テンサイ、小麦、玉ねぎを農地内で循環させて栽培



ウエストラントアールスベイ（オランダ）

2.3ha の大規模いちご農家。主に国内に向けて出荷



WAMペニングス（オランダ）

20代の若い後継者が経営参画する
200haの大規模球根農家。グローバル
GAPを取得し、北米、中国、日本などに
輸出



ファーマーズマーケット（ドイツ）

ミュンヘン市中心部の大規模ファーマ
ーズマーケット。野菜、肉、魚介類から
雑貨、土産物など出店

<研修中の一コマ>



早朝の出発のバス車内



ビール工場見学の様子



ミュンヘン市内での食事



ハーグ市内での様子

新聞等の掲載状況

令和 6(2024)年 9 月 21 日 下野新聞

「若手農業者 11 人欧州へ短期派遣」

令和 6(2024)年 9 月 26 日 日本農業新聞

「欧州農業 学び間近で」

令和 6(2024)年 11 月 30 日 下野新聞

「海外技術取り入れたい 欧州研修、知事に報告」

令和 6(2024)年 11 月 30 日 日本農業新聞

「農家が知事に欧州視察報告」

班別研修レポート

「ドイツ・オランダにおける農業の現状」

第1班 手塚 大介・石塚 泰平・駒場 潤
池田 歩夢・山本 毅・大槻 遼真

【ドイツ】持続可能な農業への取り組みと人々の意識

1) バイエルン若手農家協会との意見交換

若手農家協会は16～35歳の農業者で構成され、ドイツ全土では10万人の会員がおり、バイエルン州では2万人の会員がいる。

若い農業従事者をサポートし、農業と政治、社会、他職業とのつながりを持たせることを目的としている組織である。

説明会では、EUの農業政策やバイエルン州の農業についての説明があった。EUの農業政策であるCAPは、7年に一度見直しが行われる。そのため、EUの中心にいかん農業政策に関心のある政治家を送り込めるかが大切であり、日本以上に農業者の政治への関心が高いように感じた。また、ドイツのCAP戦略計画では「適切な農業及び環境の状態の維持（GAEC）」が規定されており、様々な規制を作り、それに対して補助金を出すことで持続可能な農業の実現を目指していることがわかった。

また、その後に行われた意見交換会では、ドイツの農業の課題などについて意見交換を行い、ドイツでも世代交代がなかなか進まないことが課題としてあり、日本と同じような課題があることがわかった。また、持続可能な農業の実現を目指し、様々な規則があるが、たびたびその規則が変わったりするため現状の農業を維持することが難しくなったり、農業への新規参入が難しくなったりという弊害も出ているということであった。

2) ヘルマンズドルファーの視察

1986年に創業したオーガニック農場で、野菜の栽培、豚・鶏などの飼育を行い、加工・販売まで一貫して行っている。

周辺の農家と協力し、地域ぐるみの地産地

消費や六次産業のシステムを構築、推進している。BIO KREISという世界で最も厳しい審査基準を持つドイツのバイオ審査機関の会員となっており、200人の従業員を抱えている。

データを見てみると1人当たりの年間有機食品消費額は、ドイツでは約24,978円、日本では約1,794円となっており、ドイツでは、約24,978円、日本では約1,794円となっており、ドイツが日本と比べると有機食品への意識が高いことがわかる。現地のガイドさんの話では、商品の価格は安くはないため、特に意識の高い人たちが買っているブランドだという話であった。また、買い物をしている消費者を見ても熱心に店員さんに説明を求めている姿も見られ、数値だけでなく、実感としても日本以上に有機食品への関心が高いように感じた。



【オランダ】オランダの効率的な農業について

1) アールスメール花市場の視察

世界最大の花き卸売市場で、ヨーロッパ・アフリカなどから花きが集められ、競り落とされた後は世界中に輸出されている。約2,000

人の従業員が働いており、173ha 以上の広さで毎日 2 万種類、4400 万本以上の花きが競売にかけられる。現在は、オンラインによる競りが行われており、農家、花の種類、花のランク、生産者の信頼度の情報などをもとに入札が行われている。非常に広い敷地の中を多くの花き類が行き来しているが、鮮度が命とされる花の価値は 1 日で 15% 下がることもあるため、競りからバイヤーへの引き渡しは 2 時間以内で行われ、バイヤーからの信頼を維持していこうとする信念を感じることができた。また、花市場は 1910 年ころの酒場から始まったといった歴史も学ぶこともできた。

2) 酪農農家(v.o.f G.J Wit & Zn)の視察

乳牛 120 頭、鶏 28,000 羽を飼育する農家で、乳牛は自動搾乳機を 3 台導入し 24 時間体制で搾乳を行っている。鶏に関しては、餌、水、暖房、換気などが自動で行われる仕組みになっており、広い施設内に鶏が行き来と生活している印象だった。また、ソーラーパネルを約 1,600 枚設置していたり、鶏のふんなどはほかの施設に送られ発電につかわれるなど、循環型農業の実現を目指している。

3) 土地利用型農家(Landbouwbedrijf N.J.W. Koeckhoven)の視察

200ha もの面積に小麦、じゃがいも、たまねぎ、てんさいを計画的に栽培を行っている。この広大な面積を 2 つの農家、計 4 人で経営を行っている。この農家では非常に大型な汎用トラクターや、乗用管理機、汎用コンバインなどを導入することで効率的な農業を実現している。またなるべく多くの利益を実現するために、集荷組織を利用した出荷ではなく、市場の価格や需要が高い時期などを見越して出荷する方法をとっている。最も印象的だったのは、ヨーロッパでは環境に配慮した農業が推進される中でも、ある程度化学農薬

などを使って効率的な農業を実現している点だった。

4) 球根農家(W.A.M. Pennings)の視察

185ha もの面積で数十億個の球根を栽培している。約 600 社と直接取引しており、収穫された球根はアメリカ、ドイツ、イギリス、日本などに輸出されている。収穫後の仕分けの作業には季節労働者などを雇用している。驚いたことは、乗用車ほどの大きさの消毒ロボットを導入しており、このロボットは病気の苗を自ら判別し引き抜いてくれるというロボットで、最新技術を間近に感じた。またこうしたロボットの他に、ウイルスに強い種を使用したり、緑肥などを活用してなるべく化学農薬を使わず自然の力を活用した農業を実現していた。



5) いちご農家(Kwekerij De Westlandse Aardbei)の視察

2.3ha のガラスハウスに「エルサンタ」という品種を 23 万本を栽培している。雨水は貯水し灌水に使用、余った養液は紫外線消毒して再度使用、CO2 ガスは近くの工場で出されたものを使用するなど循環型農業の実現している。また IPM（農作物に有害な病害虫・雑草を利用可能な全ての技術（農薬も含む）を総合的に組み合わせて防除すること）を活用し、なるべく化学農薬の使用を少なくしている。そうした環境に配慮した農業を実現し

ている一方で、ほかのいちご農家に比べると面積は決して大きくないため、独自のブランドを形成し、近隣での販売を大切にしている。そうすることで、消費者の反応を感じながら利益を上げるということを実現している。

【まとめ】

ドイツのオランダではともに EU に所属しているため、共通の農業政策がとられていたり、共通するところも多く感じたが、様々なところに国民性が出ていると感じた。ドイツは日本に比べると農地を見ても隅々まできちりと管理されている印象を受けた。オランダはとにかくチャレンジしてみるという国民性からか、最新技術などを多く用いて効率的な農業を実現していた。

今回の研修では多くのことを学ぶことができた。このような貴重な機会を与えてくださった栃木県農業振興公社をはじめ、関係機関の皆様、視察先の皆様に心より御礼申上げたい。



班別研修レポート

「ドイツ、オランダ研修を終えて」

第2班 青柳 達也・森岡 興隆・湯沢 隆一
水沼輝星・小林千歩

1 ドイツ・オランダについて(各国の特徴や印象など)

・ドイツ 環境保全に対する意識がとても高い。環境保全制度に関しては国単位での取り決めでなく、EUでの取り組みに対応する形で取り組んでいた。南ドイツの場合、山がちな地形であるために経営面積は比較小さく酪農が盛んに行われている。農地の他に湿地や休耕地を設けなければならないのは衝撃的であった。日本よりもアニマルウェルフェアの取り組みが進んでおり、日本の飼育環境とは大きな差があった。

・オランダ 国土の大半が干拓した土地なので砂質土が広がっており、大規模な営農が行われていた。特に輸出に特化した産業を展開しており、球根類や施設園芸野菜などを効率的に生産していた。干拓した土地だからこそ水に対する意識が日本とは異なり、灌漑設備が発達していてもおかつ水を資源として大切に扱っていた。

2 視察先の概要及び学んだこと

・ドイツのオーガニック農場では一貫した経営による耕畜連携やアニマルウェルフェアを重視した経営について学ぶ事ができた。また、農場に併設されたマーケットでの販売などドイツ流の6次産業を知る事ができた。

・オランダのアールスメール花市場は世界一の流通量を誇る市場を見学でき、効率的な配送システムや管理方法を実際に見る事ができた。

・また畜産農家では畜産関係の認証制度や効率的な営農方法、環境に配慮したサステナブルな農業のあり方を学ぶ事ができた。

・路地野菜農家では大型の農業機械を用いた大規模な経営を学ぶ事ができた。また、日本と異なる出荷方法や環境政策に対しての農家の声なども聞く事ができた。

・球根農家では、単に生産するだけでなく流通まで自社内で完結しており、雇用のあり方や福利厚生についても学ぶ事ができた。

・いちご農家では効果的なマーケティング方法や大規模な施設をより効率的に運用するための工夫を見てとる事ができた。



3 事前に設定した班別研修テーマの調査結果

・ドイツのテーマ

「ドイツにおける環境を意識した農業政策と雇用形態の実態について」

ドイツの視察を通してまず国としての有機農業に対するバックアップなどは日本ほど手厚い者ではないと感じた。それは国として有機農業を推進していないのではなく、ドイツの市場において有機農産物の需要が一定程度存在するため価格転嫁が可能であり補助があまり必要とされていないのではないかと感じた。有機農産物のマーケティングについても一定の需要があることから特に目立ったマーケティング方法を取っていない事が分かった。また環境保全に対しても国、EUが環境保全活動の取り組みに応じて補助金を給付するシステムを導入していることもあり、各農家が積

極的に取り組んでいた。

季節労働者についても、労働環境を整える事により毎シーズン同じ人が働きに来るのでより高効率な作業が可能になる事が分かった。労働環境や報酬が十分でないと十分な労働者を確保する事ができないので、福利厚生も手厚くなる事が分かった。

消費者の意識としても自分自身の信条に則った購買活動をしており、環境に対する意識の高い消費者はファーマーズマーケットなどに行き積極的に有機野菜を購入している。また、ネットショップによる農産物の売買などはあまり盛んではないように見て取る事ができた。

・オランダのテーマ

「オランダにおける先端技術を用いた高効率な農業の構築と気象変動への対応について」
広大な面積を誇る農地での効率的な栽培管理方法については、輪作が義務付けられておりそれに則り面積を配分し作付けをしていた。また作業担当者をメモで書き残すなどして作業の進捗を一目でわかるように工夫されていた。行政による支援も日本ほど手厚い者ではなく、自ら申告して給付を受けるものが多いように感じた。農地の相続についても日本より複雑で、参入のハードルは高く新規で自分の農地を持って開業することはかなり難しいと思われる。環境保全に関しても国から実施が義務づけられている事が多く、農家の負担になっているように感じた。

4 研修を踏まえて、今後、活かしたいこと、参考にしたこと

今回の研修を踏まえ、今後栃木の農産物をグローバルに展開するにあたって有機栽培やアニマルウェルフェアなど重視しなければならない事が多々あるように感じた。現地の消費者の意識として、自分の口にするものがどのようにして生産されたか。また環境にどの程度影響を与えたのかを意識する上で農産物が受けた認証などを参考にしているので、そ

うした認証を受ける事が必要になってくるのではないかと感じた。また、福利厚生に関してもコミュニケーションに重きを置いた考え方は日本でも導入できるものなので、快適な労働環境を作り上げていくことで労働環境をより良くすることができると思った。



5 研修全体の感想や関係機関への謝辞

まず、研修の機会を提供していただきました派遣元機関の皆様には、多大なるご尽力を賜りました。企画立案から準備に至るまで、細やかにご対応いただきましたおかげで、研修が円滑に進められましたことを深く御礼申し上げます。現地でのご指導を通じて、私たちは新しい技術や視点を学ぶとともに、持続可能な農業の未来について多くの示唆を得ることができました。最後に、研修を通じて得た知識や経験を基に、日本の農業、そして地域社会に貢献できるよう努力してまいります。この貴重な機会に関わってくださった全ての方々に、改めて心より感謝申し上げます。



個別研修レポート

「ドイツ・オランダの農業者 の声」

第1班 手塚 大介

「最新の技術を用いて、環境に配慮した農業が行われている。そして、国、消費者、農業者がそれぞれがその農業を理想としている。」

それが私の漠然としたヨーロッパで行われている農業のイメージであった。今回の研修に参加した結果、イメージ通りの部分も確かにあったが、以外にもイメージとは違う部分も多くあったように思える。

到着間近で飛行機の窓から見えたヨーロッパの広大な耕作地は、日本上空で見た耕作地とはあまりに大きさが違う驚いた。期待に胸を膨らませて、ドイツでまず行われたのがバイエルン若手農家協会の方々との意見交換会であった。そこでは初めに EU で行われている農業政策である CAP についての説明があった。特に持続可能な農業を実現していくために日本とは比べ物にならないほどの様々な規則が設けられ、それに対する補助金と罰則があることを学んだ。これに対して、若手農業者たちからは、「我々の仕事は補助金を申請するための書類を書くことではない」「厳しい規則がかえって新規の農業者の参入を難しくしている」といった意見があることに驚いた。意外にも EU が進める農業政策（理想）と農業者の考え（現実）には相違があることをこの時知ることになった。

次に訪れた老舗のオーガニック農場であるヘルマンズドルファーである。ここでは生産から加工、販売まで行っており、現地のガイドさんが「オーガニックへの意識が高い消費者が訪れる」ということを話しており、店員の方に熱心に質問をする消費者の姿を見てドイツ国民のオーガニック食品への意識の高さも感じる事ができた。

ドイツを離れ、オランダを訪れて視察したのは酪農農家や球根農家である。酪農農家では、乳牛の自動搾乳機や鶏の自動管理システムを活用しながら、ソーラーパネルなどを活用した循環型農業を実現していた。球根農家でも自動で病気苗を見つけて処分するロボットや緑肥などを活用し、自然の力を最大限利用する農業を行っていると言っていたのが印象的であった。また、その後で視察したいちご農家でも雨水を灌水に利用したり、栽培に利用した養液を外部に放出せず再利用したりするなど環境に配慮した農業が実現されていた。



一方で、大規模に土地利用型の農業を行っている農家の方は、ある程度化学農薬を使用して栽培を行っており、EU が推し進める環境に配慮した農業や有機栽培などがかえって化学農薬を多く使用する結果にもつながっているのではないかという考えも聞くことができ衝撃を受けた。

多くの視察や意見交換を通して、やはり農家としての信念が大切であると感じた。自分がどのような農業を実現したいのかというしっかりとしたビジョンを持ち、それにあった選択をすることが重要だと学ぶことができた。

特に環境にスポットをあてて書いたが、ほかにも様々な最新技術の導入、消費者との向き合い方、独自ブランドの形成などさまざまと学ぶことができた。学んだことを生かし、改めて一流の農業者を目指したくなった。今回の研修はそういった非常に刺激的な研修となった。

このような貴重な機会をいただいたことに感謝したい。



「ヨーロッパで学んだこと」

第1班 石塚 泰平

この研修を通して学んだことが多くあった。自分は非農家であり農業とはほぼ無縁の関係で周りからも学ぶことある？や何を学ぶの？など沢山の言葉をもらった事や自分でも考えることが多くあった。だが自分は畜産について学びたいと思いこの研修に参加させていただいた。ドイツでは日本と違った畜産経営に驚いた。ニワトリや豚の放し飼いでは日本ではありえないものであった。日本では家畜衛生法に基づき完全防護服や消毒、ケージ飼いが主流であるが、ヨーロッパではアニマルウェルフェアが進んでおり動物に対しての考えがとても深いと思った。放し飼いは一般的で施設の中を自由に歩くニワトリたちが幸せそうに見えた。また同じ施設で牛、豚、ニワトリ全てができる屠畜所があり自社で育てた家畜動物をその場で屠殺して施設内の販売店でお肉を販売するという流れがすごいと思った。日本では時期が来た動物たちを業者が来て動物を各県の屠畜所にもって行ってもらう枝肉にする方法しか知らなかったので発想も経営的にもプラスになりブランド化することも実現できるのかなと思った。広大な施設を要することで可能になり周りの人たちと協力してできるのがドイツだなと思った。

次にオランダでの畜産もとても魅力のあるものであった。行かせていただいた畜産農家では牛120頭、ニワトリ3万羽を飼育していた。この量を夫婦二人で飼育しており驚いた。ニワトリは飼料の貯蔵庫にパイプをつなぎ自動給餌を使いニワトリにも人間にもストレスがとても低いと話していた。それが最大のメリットだなと思った。

ニワトリにはデビークも一切せずストレ

スを減らすことに目をつけることで出荷したときにいい肉質にもつながると思った。

乳牛では絞リ100頭、乾乳20頭でホルスタインとジャージー種を入れ搾乳ロボットを3台導入し搾乳時間の減少、牛が好きな時間に搾乳ができる方法だと話していた。

100頭規模で3台も搾乳ロボットを入れるのかと驚いた。搾乳ロボットを入れることで労働時間が省けると話しており面白いなとも思った。また給餌方法も海外ならではの方法で1日1回の給餌でそのあげている飼料もワラと濃厚飼料などと完全にミックスさせて与えていた。子牛にも自動哺乳機を使い最低限の労働力だなと思った。機械化を要し人とは違った個性的な生き方、やり方をするのがオランダだなと思った。



この海外研修を通して冒頭でも触れたが非農家だから、というような差別的な言い方をされたことを消して忘れない。非農家というレッテルがそんなに悪い物なのかと考えた。このような経験を通して学んだことはまだ農業に対しても差別化があると感じたことであ

る。今の日本の農業はピンチなのにまだまだ収まることのない差別。この差別は日本だけで海外にはそんなことはないと言っていたことも確かである。農業という偏見や差別を無くしたいとこの研修で一番学んだことでありちょっとした夢もできた。これから先まだまだ収まらない偏見を無くすためにもこれから農業をやってみたい、少しでも農業に興味を持ってくれた人たちの背中を押してあげられる存在になりたいと切に思った。



「海外派遣研修に参加して」

第1班 池田 歩夢

私は最近、海外研修でドイツとオランダを訪れ、これらの国々での農業の現状とその課題について学ぶ機会を得た。特に、農業における持続可能性や環境保護、そしてその対策について多くのものを目の当たりにした。ドイツとオランダの農業は、それぞれに異なる特徴を持ちながらも、共通して環境への負荷を減らすために様々な取り組みが行われていることが印象的であった。



まず、ドイツでは農業における持続可能性が重要な課題として認識している。特に、化学肥料や農薬の使用量を減らすことが求められており、有機農業の推進が進んでいる。現地の方々との交流会を開いていただき有機農業について話をする貴重な体験があった。交流会では、私たちが学んでいた有機農業の知識や日本での取り組みを紹介し、参加者の皆さんと意見を交わした。ドイツでの有機農業の実践例や環境保護への取り組みについても聞くことができ、多くの刺激を受けた。異なる文化や様々な視点から学ぶことで、有機農業の持つ可能性やこれからの課題を深く理解することができた。交流会の後には、一緒に食事をする時間もあった。食事の席では主にお互いの文化や日常生活について話し合い、

和やかな雰囲気の中で仲を深めた。共通のテーマを持つ仲間として、リラックスしながら交流を楽しむことで有意義な時間を過ごすことができた。

オランダでは農業の効率化と環境への配慮が同時に求められていることが分かった。オランダは、農業生産量が非常に高いことで知られており、限られた土地で効率的に農業を行う技術が発展しています。特に温室栽培が盛んであり、ここでは高い水準の環境管理技術が導入されていた。さらに畜産にも先進的なスマート農業が導入されている。例えば、乳牛の飼育では、センサー技術やIoTを活用した健康管理が行われている。牛の体温や行動、食欲などをリアルタイムで見られるようにすることにより、病気の兆候を早期に発見し、治療を迅速に行うことが可能であった。特に注目すべきは、AIを活用した自動搾乳ロボットである。このロボットは、牛がミルクを出したいと感じたタイミングで自ら搾乳エリアに来られる仕組みになっている。この自由な環境により、牛のストレスが大幅に軽減されるとともに乳の品質や生産性も向上していることが分かった。一方で養鶏分野でもスマート技術が活用されている。センサーで鶏舎内の温度や湿度、二酸化炭素濃度を監視し、最適な環境を維持するシステムが導入されている。また、鶏の健康と快適さが確保されている。また、光を調節する機械も導入されており鶏の活動時間に合わせて明るさを自動で調節することで、効率的な飼育が実現されている。これにより、鶏のストレスを軽減しながら、卵や肉の生産性を向上させていると現地からの声を聴くことができた。この研修で、有機農業の可能性と地域社会と

の結びつきの重要性を学んだ。ドイツとオランダでは土地の利用が計画的で、環境保全と生産性が両立している点が印象的であった。今後は日本の耕作放棄地問題に取り組み、地域と連携した持続可能な農業モデルを構築したいと考えている。また、日常の実践を通じて、環境負荷を抑えた農業を広げるための具体的な方法を模索していきたい。



班別研修レポート

「ヨーロッパの農業を感じて」

第1班 大槻 遼真

1. はじめに

私は、県の農業大学校で施設野菜について勉強していて将来は、父の後を継ぎトマトやその他作物の栽培をしたいと考えている。この短期海外派遣研修では、日本とは大きく違うオランダの先進的な農業やドイツの有機農業にふれて大きな刺激をもらいとても貴重な経験になった。

2. ドイツの有機農業について

バイエルンの若手農家との交流会では、ドイツの農業がどのような状態なのかをバイエルンの役所の人に話を聞くことや、実際の農家との交流をすることができた。ドイツにも日本の4Hクラブのように若者たちが交流や活躍して地元を盛んに盛り上げるグループがあることに驚き、私が交流した農家さんはどの方も前向きだった。バイエルンの農業の特徴としては、有機農業に力を入れていて南部の地域では元々海だった地域のためカルシウムなどの栄養が多いので麦などの作物の栽培が、中央部では南部に比べて作物の生産が劣るため畜産業が盛んに行われており日本のように地域の環境に適応した農業が行われていた。

また、有機農業を行う農家やビール工場の視察では豚や鳥などの飼育やその加工を行いながら、80haの作物の栽培を行いパンの加工やコーヒー豆の焙煎を行う農家を視察することや、伝統的なルールの下、麦・イースト・ホップ・水のみを使用してビールを作る工場を見学して、自分の農業に対する価値観が大きく変化した。

3. オランダの農業について

アムステルダムでは、はじめに競り下がり方式が行われている世界最大級の花市場の見

学を行った。従業員は約2000人で、花の販売から流通の他にも品種についての研究なども行っていた。工場の中は、とても広く多くの運搬機械が使われていた。また、それぞれの花の適切な温度で流通しており花産業の中心を担っていることを実感した。

また、農家見学では鶏約3万羽・牛を約120頭飼育しながら100ha近い規模の牧草を栽培している畜産農家や2つの農家、計4人で200haもの規模のなか作物であるジャガイモ・麦・てんさい・タマネギを周年栽培している農家の視察や185haの球根を栽培して、世界各地への流通販売を行う球根農家への視察をして、スケールの大きさを肌で感じ、大型トラクターやコンバインの他に、ウイルスに感染した球根を除去するロボット、自動搾乳機を2機所持する農家を拝見して技術の高さを感じた。



4. 施設栽培について

最後に、高さ4.5メートル奥行きが90メートルある施設で2.3haほどの規模のあるイチゴ農家への視察をした。蜂は、日本で主に使われているセイヨウミツバチではなくトマトで使われているマルハナバチの使用、土は、ココピートが使われていた。また、Co2は発生装置を使用するのではなくシェル社が

らパイプラインを通して買っていた。

5. まとめ

この海外研修では、日本とは大きく違うドイツやオランダの栽培規模や栽培技術を見て大きな刺激を受け自分の価値観が大きく変化した。また、視察先の農家さんは前向きな方が多く自分も明確な目標を立てるとともにより前向きに行動していきたい。



「ヨーロッパの農業を視察して 感じたこと」

第1班 駒場 潤

1.ドイツの農業

視察したバイエルン州はドイツの中で一番大きい州で、農業と林業が盛んでした。気候は暖かい北海道に似ているそうです。

環境保全に対する意識が高く、環境保全活動の取り組みに応じて補助金を給付するシステムを導入していて、各農家が積極的に取り組んでいるのが現地で見てとれました。農地、またそれ以外の場所でも隅々まできっちりと管理されていたのが印象的でした。

若手農家協会との意見交換では日本とドイツの農業の課題などについて意見交換する中で、小麦の生産が盛んなバイエルン(10t/ha)に対して日本の生産量(4t/ha)を教えると「それしか穫れないでどうするの？」と日本とドイツの違いに呆れて苦笑いされたのが印象に残っています。しかし、そんな農業大国でも農業従事者の高齢化は進んでいるようで、農家が減少しているという現状を知り、日本と同じ問題を抱えていることに驚き、将来の農業に危機感を感じました。

オーガニック農場での視察では、生産、加工、販売まで一貫して行っていました。ドイツで有機食品は健康思考の意識が高い人に関心があり需要があるようでした。ただ、毎日有機食品を食べているわけではなく、週に2回くらい健康で体に良いものを食べるという習慣の人が多いようでした。通訳ガイドさん談ですが日本の食べ物はドイツでも人気があるそうで、日本のものなら何を食べても健康になれると思うのだそうです。それだけ日本の作物は安心、安全というイメージが世界的に強いのだろうなと感じました。



2.オランダの農業

国土の大半が干拓した土地で灌漑設備が発達していました。球根類、施設園芸野菜、花き類の生産が盛んで、車窓から見えたどこまでも続く連棟ガラスハウスには驚愕しました。

世界最大の花き卸売場アールスメール花市場では約2000人もの従業員が働いており、全長2kmもある場内をカートが走り回る光景は圧巻でした。オンラインで競りが行われ、農家、花の種類、花のランク、生産者の信頼度の情報までも表示され入札が行われていました。

酪農家、球根農家では最先端の農業機械、ロボットを見ることができました。24時間体制で搾乳を行う搾乳ロボット、病気の苗を自ら判別し引き抜く消毒ロボットなど最新技術を間近に感じました。

土地利用型農家では非常に大型なトラクター、汎用コンバイン、乗用管理機など日本と比べものにならないサイズ感を目の当たりにして、世界のビッグな農業を体感しました。

オランダの人々の精神は「失敗を恐れない、何事もやってみる、困難なときはどうしたら乗り越えられるか考える」ということだそうです。チャレンジ精神があるからこそ、先進

的農業大国にもなったのかもしれませんが。オランダの国民性、情熱に考えさせられ心に染みました。

最後に

海外研修で学んだこの貴重な経験を自分だけで留めず、まわりに教え伝える事は大切だと思います。また、次の機会があるならば是非たくさんの方の後輩達に海外の農業に触れ、直に感じてきてほしいと心から思いました。

日本でもできること日本だからできることを考え、今後の会社経営、地域農業の発展に貢献できるよう努力して参ります。

栃木県農業振興公社をはじめ各関係機関の皆様にご心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



「ドイツ、オランダの農業の 学び」

第1班 山本 毅

1.はじめに

私がこの研修に参加した理由は、農業先進国と呼ばれるドイツ・オランダの農業政策や工夫点や盛んである有機農業について、また日本と海外の農業のやり方の違いについて学びたいと思ったからである。特にオランダは日本よりも農地面積が少ないという事実があるのにも関わらず、農産物の輸出額が世界2位という業績があるが、それを成すためにはどのような政策や戦略があるのかとても興味を持っていた。

2.ジャガイモ農家(オランダ)の視察

ジャガイモ農家の視察で、ジャガイモ・タマネギ・甜菜・小麦・大麦を100ヘクタール栽培している農家がいた。その広大な面積での栽培でも、厳しいEUの農業政策を守りながら家族で役割を決め、協力しながら経営していることに衝撃を受けた。また、4年経たないと同じ圃場で作付けしないというその農家独自の工夫により、土地を回す輪作をし収量の安定と品質を維持していると伺った。この輪作をしないと40%~50%も収量が落ちてしまうそうだ。そんな話を伺い、輪作の大切さを学んだ。自分自身、3年前からジャガイモ栽培を行っているが、欲をかって農地を回さずに連作してしまっている。これから先、安定した収量と品質を維持していくためには、この視察先のように穀物を作るなど土地を休ませながら、10年20年後先の将来の農地をイメージしていかなければ何も作れない農地になってしまうと気付くきっかけになった。

3.現地の若手農家(ドイツ)からの日本の印象

現地の若手農家との意見交換で日本の農業の印象を聞いてみた。「日本人は食には興味が

あるが、農業にはあまり興味がない印象がある。」という言葉が返ってきた。実際、農業に馴染みがない人は飲食店などで綺麗に盛り付けられた料理を見て、「綺麗だな」や「美味しそう」という感想は思い浮かぶが、その料理に使われている食材は誰が作ってるのか、どのようにして作られてるのかなどといった疑問は浮かばないのではないかと考えた。したがって、食から農業に興味を持ってもらうために私にできることは、農業をあまり知らない人たちや園児・児童などの食育に力を入れ、農業に興味を持つきっかけになるような「農業」を発信していくことだと強く感じた。ネット社会と言われているこの時代に、SNS媒体を有効活用し、発信していきたい。



4.スマート農業(オランダ)について

スマート農業を行っている農家を視察し、牛の自動搾乳ロボットや球根農家ではウイルスに感染した球根を自動で抜いてくれる自走ロボットなど規格外な機械を目の当たりにし、日本との差を感じた。このような機械を取り入れることで働き手の時間に余裕ができるのではないかと考えた。機械を導入するということは大きなコストがかかるが、自分自身が行っている農業でも徐々にスマート農業に投資し、自分の人生と農業を共に充実させて行

きたいと思った。

5.有機農業(ドイツ)について

今回の研修で有機農業について学ぶ場面が多くあった。極端に偏った有機農業に取り組むのではなく、堆肥や緑肥などの有効活用を今後の私の農業に取り入れ、化学肥料を無駄に入れることなく経営改善を図るとともに、SDGsを意識し環境に少しでも配慮した持続可能な農業を目指して行きたいと考えた。

6.最後に

今回の研修で多くのことを学ぶことができました。このような貴重な機会を与えてくださった栃木県農業振興公社をはじめ、関係機関の皆様、視察先の皆様に心より御礼申し上げます。この研修で学んだことをこれからの農業に生かして参ります。ありがとうございました。



「学びの多かった海外派遣研修」

第2班 青柳 達也

今回のドイツ・オランダでの農業研修を通じて、先進的な農業のあり方を間近に学ぶことができた。特にドイツでは、現地の若手農家の方達との交流会を行った。フリートークを通してお互いの国の農業について理解を深めた。若手農家でも職種は農業、林業、水産業さまざまな方と交流でき農業について多面的に議論する事ができた。中でも農地の相続が複雑で大きな参入障壁になっていることや、環境保全のために農地の3~5mの農薬散布が禁止されていることなどリアルな農業事情について学ぶ事ができた。



環境に配慮した農業の先進国であるドイツの農家が政策に対してどのような意見を持っているか知ることでもた次に訪問したオーガニック農場では野菜に加え豚、鶏、肉牛などを飼育しており、畜産部門で出たフンを農場に散布するなど農園内で循環型農業を実施して環境に配慮した農業を実践していた。

また、アニマルウェルフェアへの取り組みがとても進んでおり、農園内に併設された屠畜場にて屠畜することで輸送のストレスを最低限に抑えるなど日本では見ることでない生産形態がとられていた。これらの農産物や肉類は自社内で加工され併設されたファ-

ーズマーケットで販売されており、生産、加工、販売まで一貫して行う高度な6次産業化と耕畜連携を一箇所で行う経営に驚いた。

オランダでは、世界最大級の花市場であるアールスメール花市場の見学を通じて、効率的な流通体制の重要性を実感した。見学を通して栃木県の農産物も効率的な流通形態を導入することで同様のグローバルな展開が可能であると確信した。またヨーロッパで多い季節労働者の雇用安定のための福利厚生についても実際に見学することで新たな学びを得ることができた。特にいちご農家ではアットホームでみんな一緒に働く空間づくりを心がけているようで、福利厚生を充実させることで次のシーズンも働きに来てもらえるとのことであった。全員で休憩室にてコーヒブレイクをしながら意見交換をした時も部屋にはコーヒメーカーが備え付けられ、誰でも自由に使うことができるようになっていた。このような日常的に感じることでできる福利厚生が良い経営の秘訣なのかもしれない。こうした設備は従業員を雇用している全ての経営態に設置されており、安定した雇用のためには必要不可欠なのだと確信した。

私はこの7日間の研修において日本で作られた農業の常識を打ち壊された感覚を何度も味わった。多文化が共生する社会で農業を経営する上での学びは、これから就農する私にとってとても大きな学びになった。何より、この研修を通して同じ県で農業を営む、志す心強い仲間ができたのも大きな収穫の1つだと私自身思っている。今回の研修で得た知識やアイデアを基に、栃木県の高品質な農産物が海外市場で一層評価されるよう努めていき

たいと思った。

特に、地元の農業に新しい技術や価値観を取り入れつつ、地域の強みを最大限に活かす方法を模索していきたいと思う。この研修で得た経験を糧に、栃木県の農業を次世代に繋ぐ責任を果たすべく努力を重ねていきたいと思う。



「ヨーロッパ研修を通じて 自身に生かせること」

第2班 森岡 興隆

私は現在、栃木県農業大学校いちご学科に通う学生である。

来年度より真岡市にて新規就農予定で就農前の時間を利用して、ヨーロッパの最先端の技術、気候変動に対する対応、持続可能な環境に対する取り組みを学びたくて今回応募させていただいた。

① ドイツでの取り組み

ドイツでは有機栽培の取り組みや、バイエルン州の若手農業者たちと直接意見を交わすことが出来た。

有機栽培の農場では自社で畜産を行い、そこで出たふんを作物の肥料や発電の燃料として再利用する循環的な取り組みをしていた。また動物優先のアニマルウェルフェアを重視しており、そこで作られた卵、ハムやソーセージなどは安心安全な食べ物としてドイツ全土自社ブランドショップで食に対する意識の高い層に高付加価値として認知されていた。

バイエルンの若手農業者との意見交換会では EU の環境に対する政策や補助金が出る仕組みを学び、若手農業者との話では年々補助金が下げられ、求められるハードルが上がるなど厳しい現実を知ることが出来た。

② オランダでの取り組み

オランダでは世界最大の花市場の見学、酪農と土地利用型農家、日本にも輸出している球根農家やいちご農家の見学を行った。いずれも大規模農家で効率の良い経営を行っている状況であった。

その中でも先進的ないちご農家一番が印象に残った。排水を一滴も出さない循環式システム、CO₂ を近くの精油所からパイプラインで直接送り込むインフラ設備や自社発電の

仕組みを学んだ。



③ 最先端いちご農家の栽培技術と課題

栽培品種はエルサンタというヨーロッパで人気の、高い生産性と長い収穫期間が見込めて果肉が固く日持ちや輸送性に優れている品種を採用していた。

栽培技術では苗を -1.5°C に氷結保存された物を苗業者から購入して育苗の手間を省いており、定植も苗を並べ上から培土を被せる方法で軽労化を図っていた。

化学農薬の使用も最小限にとどめて最新式の天敵資材を導入するなど環境に配慮した栽培に取り組んでいた。

売り先は独自の販路でハウス先の自販機による直販から近隣のスーパー、海外輸出まで行い新鮮で赤く美味しい、いちごを届けるコンセプトのもと取り組んでいた。

最新鋭の機器と技術を導入し効率性を上げ作業の軽労化の図りながら、環境に配慮した持続可能な農業で収量は 10a 当たり 12t と国内平均の 3 倍を超える高収量を実現している

事が一番の衝撃であった。

課題もあり、EU では農業が環境を破壊している産業という考えが日本以上にあること、物価高騰や人件費高騰で利益率に影響が出ているとのことであった。

前者では自分たちの取り組みを知って貰う必要があるため年に数回オープンファームを開催して丁寧に案内を行い、パッケージにいちごが出来る過程の写真を添えて解説するなど知ってもらえる努力をしているとのことであった。後者はとても大変な課題ではあるが、従業員を大切にすることにより戻って来てもらえる。選ばれる農場になることが大切と語っていた。

④ 最後に

今回の研修で私はヨーロッパの環境に対する取り組みと最先端の栽培技術、大規模農場の経営と課題を学ぶことが出来た。今回学んだことを自身の経営に少しずつ落とし込んでいき、生かしていく。そして将来は栃木県を引っ張って行ける農業者になることが目標である。最後になりますが農業振興公社はじめ関係機関に対し、このような貴重な機会を設けていただき感謝申し上げたい。



「視野が広がった海外短期派遣 研修」

第2班 湯沢 隆一

1. はじめに

私の家は先祖代々の田畑を持っている農家である。私が小さいときまでは、米を作っていたが、今は田んぼを賃借して、大豆やそばやコメなどを作ってもらっている。家では家庭菜園ほどの広さで祖母が野菜を作り続けている。私が社会人となり、色々なことをやってみようと思っているとき、自分の家の田畑を自分で農業をやってみようと思い始め、農業未経験の私は栃木県農業大学校とちぎ農業未来塾基礎研修を受講し、農業の一步を踏み出した。

今、農業を始めて約2年であるが、農業は大変なときもあり、作物ができた喜びも大きいので、日々の生活も充実している。

この海外短期派遣研修があることは、農業を学ぶ私に、出会えた、与えられた縁だと思い、参加してみようと思った。また、この研修で海外農業とはどんなものなのか、自分の知らないことをいろいろ見て感じて学んできたと思った。そして、今後の自分の農業に役立たせたいと思ったことが参加した理由である。

2. ドイツ

ドイツでは最初にバイエルンの若手農家と交流会に参加した。同年代の若手農家との交流はとても楽しかった。バイエルン州には2万人の農家がいるとのことで、まずはその規模に驚いた。EUの共通農業政策は7年ごとに見直されていて、その中でも一番重要なのが予算の振り分けとのことであった。交流の時間が短く感じられるほど有意義な時間でした。

次に訪問したのが、ヘルマンズドルファーである。日本ではほとんど見られない規模の有機農業の農園であった。120人の従業員が

勤務していて、農畜産物の生産から加工、販売まで手掛けている。例えば、豚は繁殖から肥育をし、屠畜のうえソーセージなどにして販売している。また、有機栽培のコーヒーも生産及び販売を行っていて、とても興味深かった。



3. オランダ

オランダでは、最初にアールスメール花市場を訪れた。世界最大の花き卸売市場に圧倒された。夕方から朝4時の間に花が市場に運ばれ、世界各地に運ばれる。市場では2,000人が勤務している。職員が絶え間なく花を仕分けしたり、運んだりしている光景が印象的であった。

次に酪農家を訪れた。酪農家と聞いていたので、見られるのは乳牛だけかと思っていたが、養鶏も行っていて驚いた。経営規模は乳牛120頭、鶏30,000羽で、この規模を夫婦2人で経営しているということは二重の驚きであった。少人数で経営が行える秘訣はスマート農業にあった。搾乳ロボットが導入されていて、乳量はもちろんであるが、乳質も判別してくれるのである。酪農についてとても勉強になる貴重な経験であった。

オランダで他に印象に残っている視察先はウエストラントアールスベイである。「できるだけ熟したいちごを栽培し、近くに販売する」をコンセプトに経営を行っている。まず、8月に「冷凍した」苗を定植することが新鮮であった。12月に収穫し、1月～2月は休み、3月～4月に収穫するスタイルにも栃木県とのあまりの違いに驚いた。

4. 最後に

最後にこの海外短期派遣研修に参加させていただけたことに感謝を申し上げたい。特にお世話になった日光市の方をはじめ、栃木県農業振興公社他関係者の方にお礼申し上げます。

そして、今後は自分の好きな農業に取り組み、野菜作りに専念していきたい。また、地域に根差して、地域に貢献できるように積極的に活動していきたいと思っている。



「ドイツ&オランダの農業」

第2班 水沼 輝星

ドイツ&オランダの農業

海外の農業は大規模でありながら、農業機械を使い最小限の労働人数で農業経営をしている。そのため、農業機械が大きく、日本の機械の2倍にした程度の大きさであった。また、加工場や農作物の調整場、保管庫などの建物を持っており、家よりも大きかった。そして、オーガニックや輪作などを駆使して、環境保全や消費者のニーズを考えて農業をしていた。しかし、オーガニックは新規で取り組むと経営が難しく、取り組む人が少ない。そのため、ドイツやオランダでオーガニックに取り組む農家は少なかった。海外は一つの作物に限定して栽培している農家が少なかった。ほとんどが、麦とジャガイモやニンジンと玉ねぎなどの輪作や複合で栽培している。これにより、病害虫の発生を防除し品質低下を抑制する工夫をして農業を行っている。また、これを行うことで補助金を支給されることもある。

環境保全

ドイツの農業政策は7年ごとに更新されるため、変化が激しい。政策内容も環境に配慮されている。例えば、草を伸ばさないように草刈りをすることや、田んぼを焼いてはいけないことなどがある。これを実践しないと罰金や補助金が支給されないことが起きる。しかし、これを守ることで、1haの小規模な農家から大規模農家まで補助金の金額は変化するが、支給される。一方で、条件が厳しすぎるとブドウ農家や酪農家は条件を達成することができずに辞めてしまう可能性があるという課題を知ることができた。このことから、農業者と政府の人とのコミュニケーションをし

かりとることが大切である。オランダのいちご農家では雨水をため池に集めて農作物に灌水したり、二酸化炭素をいちごで利用したりして、自然を活用して無駄のない農業に力を入れていた。2.3haの温室ガラスで年に2回収穫している。その他にもマーケティングにも味やパッケージに力を入れSNSで情報発信している。パッケージに二次元コードでイチゴの栽培方法や会社概要などを載せて、消費者に楽しんでもらうために取り組んでいる。そして、自分で直接販売やスーパーとの契約をしていることに驚いた。海外の農業を見学して思ったのが、自分から考えて挑戦することで成功を収めている農家が多かった。私はこの経験を就農した際に自分でブランド化や無駄のない農業を求めて生きたいと考えている。また、スマート農業を活用して最少人数で農業経営をしていきたいと考えている。



アールスメール花市場

アールスメール花市場の総面積は100万㎡ほどある市場で、さまざまな花が取引されている。多くの人が小さい乗り物に乗り、花を移動している光景が一番印象に残っている。乗り物のスピードが速く、ぶつからずに運転する技術が素晴らしいと感じた。また、乗り物の後ろに15個程度の花を載せたコンテナ

をけん引して運んでおり、日本では見られない光景であった。1 分もしないうちに花が取引され、取引の仕組みを理解することができた。また、これに対応して素早く花を移動させる社員がすごいと思った。私は一度でいいので働いてみたいと思った。

今後

私は栃木県農業大学校を卒業後、農業関連企業に就職予定である。ここで、海外の経験を生かして、農業技術を提供したり、海外の体験談などを話したりして、海外と日本の違いを広めていきたいと考えている。そして、最終的には実家に就農して農業のやり方を少しずつ変えていき、スマート農業を活用した、安全・安心な農業を実現させていこうと考えている。また、消費者のニーズを考えて質の高い生産物も少しずつ取り入れていき、ネット販売などで流通経路を広げていきたいと考えている。最後に、今回の海外派遣短期研修でさまざまな農業のやり方に触れることができ、日本で取り入れるのは難しいかもしれないが、ドイツ・オランダのようなカッコいい農業を目指していきたい。



「人と違うことがクールな世の」 中に」

第2班 小林 千歩

1. オーガニック、農業経営について

西ヨーロッパの気候は病害虫が出にくい冷涼な気候で、日本は病害虫が発生しやすい多湿温暖な気候であり、栽培は日本は狭く細かく、病害虫防除も回数が増えることは致し方なく感じるとともに、ヨーロッパのような大規模、ほぼプラント栽培が基本となると大量生産もしやすく、オーガニックというブランドがつくことでの高付加価値製品の産出も流通も容易であれば鬼に金棒状態であると感じた。ただ販売においては消費者の意識の違いがあるのは日本と変わらず、とくに昨今の様々な物価の高騰で消費者が価格を気にするところも同様で、ドイツの若手農家の方々から聞く話は日本の慣行農家と変わらない悩みを感じた。ここに関しては日本もドイツも売り方や見せ方がいかに大切であるか、農業は一次産業であるが経営であることは変わらず、経営視点で見た時にどう商業ベースに引き上げるか、販売力が物を言うところも変わらないと感じたことから、いかに上手に経営全体を客観的にとらえられるかがキーなのだろう。

2. 女性農業者について

私のような女性農業者の数についても現地の方々聞くことができ、ドイツではやりたいたいという人々は増えているが実際に参入できる人は少ない、嫁として家族経営に関わる女性が多いという、日本と同じような現状であった。オランダで訪れた大規模農家は奥様が耕種経営、ご主人が花き経営とそれぞれが経営をされており、比較するには零細であるが我が家の経営体に近く、激励のお声をいただいたことはなによりも感動するものであった。

3. お国柄の違い

また海外でまず一番に驚いたことは若者たちがそれぞれしっかりと意思をもって生きている、というところである。私自身子育てをしていることや、まちづくり事業や就労支援に関わることも多いため、日本の今を生きる若者たちに不安を覚えることも多く、これからの私の住む地域は、日本は、これからどうなっていくのだろうと感ずることばかりだったため、研修期間中に出会い話を聞く若者たちの堂々とした姿や活力にただただ感心するばかりだった。これはそもそも日本との国柄に大きな違いがあり、成人したら強く生きていかなければならないという覚悟が早い段階から身に付き、それが当たり前の国とそうでない国（日本）の違いだろうと感じた。

またオランダの人々の精神もとても興味深いものが多く、逆境に強く、悩みながらもどう解決するか常に考える、いくつか選択肢を持ちやってみるという姿勢を大切にしていると聞きし「人と違うことがクール」という文化は日本人にも広まるべきだと感じた。



4. イチゴ農家とのふれあい

イチゴ農家では販売方法に関しては日本と変わらないと感じ、私自身ネットを通してイチゴの販売をしているが、オランダでは丁寧に扱ってもらえる配送技術が進んでおらず、ネットショップでイチゴを売ることはできないということだった。この視察先の農家とはインスタでフォローし合い、視察後もDMでやりとりできたことは大きな励みとなった。

5. 最後に

今回の研修を通して、現地の素晴らしい景色をたくさん見られたこと、そして海外の人々の生き方や精神を実感できたことは自分が今後どう生きていくか、どういう経営をしていくかという問いに直接強い影響となった。研修にあたり沢山の方にお世話になり、大変感謝している。また、私のような農家の嫁が海外研修に行けるのが当たり前になることを期待したい。



研修に随行して

令和6年度栃木県青年農業者海外短期派遣研修が終了して早くも5か月が過ぎました。

この研修に事務局として随行し、海外農業について見聞できたことは業務を遂行していくうえで、大変貴重な経験となりました。

研修先では、現地の農業者との交流を通じて、彼らの知識や技術、そして農業に対する情熱を学ぶことができました。特に持続可能な農業の実践や最新の技術導入に関する取り組みは、私たちの農業に対する視野を広げるものでした。また、現地の農業者が直面する課題やその解決策についても理解することができました。

研修を通じて得た交流や経験を今後の業務に活かしていきたいと考えています。特に研修生との出会いは大きな財産となりました。帰国後、研修生の農業に対する自信は研修前と比較にならないほど満ち溢れていました。研修生は今後、栃木の農業を盛り上げてくれるものと信じています。

最後に、この研修を支えてくださった関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。皆様のご支援があったからこそ、この貴重な経験を得ることができました。今後も本県の農業振興に寄与していければと思います。ありがとうございました。

令和6年度栃木県青年農業者海外短期派遣研修サブマネージャー

櫻井 裕也